

COSMOS集



上々 芳賀 テル子 福島

菊人形展を車椅子にて巡りたり二人の娘に世話になりつつ
新そばのはり紙のあるそば店にそばの香りと歯ごたへ味はふ
五回目のコロナの予防注射を受け九十三歳まだまだ元気
コロナ予防の注射会場我よりも年上の人見あたらずなり
受診日に食欲問はれ「たつぷり」と言へば「上々」医師との会話

十日夜 神谷 倫子 埼玉

水上 比呂美選 「あすなる集」特選

鹿の遠鳴き 斎藤 嶺也 北海道

歌会は楽しかつたと伝へきく我のぬ間のたのしき歌会
闇を裂きヒューユヒューユと霜月に鹿の遠鳴き雪はもうすぐ
立ちあがり臭きカメムシ威張つてる触りたければとはつてみよと
小春日に落葉サクサクふみしめてうから集ひて墓終ひせり
墓守を解かるときの寂寥に石を所望すその墓石を

三海 里冲 中居 久子*岩手

亡き姉の庭に実れる柿五つ時雨の雫が冷たくひかる
朝霜が一面覆う草原に牛の鼻息白くなりゆく
歯科治療受けつつ見ゆる西空に優雅に飛び鶴の一群
計画のいくつか老いにかこつけてなされぬままに冬に入りゆく
荒波をかき分け出で航く老船の鱈の漁場は三海里冲

つくも 神前 田 亜津子*神奈川

つくも神付きたるような物たちに囲まれている冬の空き家に
そこここに思いの残る古き家の天袋の中の父母の礼服
納戸から昭和バブルの引き出物つぎつぎ出土す遺跡のように
降ろされた神棚一式を台車にて神社へ運ぶ息子と二人で
住む人のなけれどそこに在ることで支えとなりし空き家の実家

低反発 マット 荒川 ゆみ子 東京

ドアノブに冬の乾いた棘生えて裸の指を強く刺したり
アクリル板そこにあるやう 酔ひどれて帰宅の人に話しかけても

低反発マットに横たはり眠れない雨の夜にはマンボウになる
生徒らの開いた傘が控へめな(個)を見せながら朝の道来る
丈低くうつむいて咲く純白のクリスマスローズの蕊はにぎやか

原賀 璉子選

陽 性 清水 佑太郎*東京

風邪じゃなくインフルエンザとも違う弱い悪寒が消えない湯船
全身の寒気をベッドで温める三年振りに神に祈って

「陽性です」医師の言葉の重力に診察室の空間歪む

喉彦が腫れて気道を塞ぐ夜ひっきりなしに咽せつつ更ける

療養のホテルを出る日の体調がこんなに悪くて出て良いの、おれ？

青 き 月 前 中 映 東京

めいっぱいひらいた口で受け止める秋の雨 秋のひかりのしづく

松葉杖ひとにあげて新郎が記念写真の列に入りたり

ふくらんだ袋のやうな物体が浮いてゐてやがて猫だとわかる

明日世界が終はるなら木は植えないね 真白の米をていねいに研ぐ

性欲にかまけて過ごすいち日の終はりに青き月が出てをり

神 無 月 石 田 美智子 新潟

川の瀬に洗ふ大根のちぎれ葉は流れをみせてとほざかりゆく
ひとつ家にふたり棲みつつそれぞれの部屋にみちたる閑かなねむり
ひえびえと鎮まる海のそのむかうかすみてみゆる佐渡の鳥影
とろろ芋しやりしやりきざむ組板のおとすきとほる朝のキッチン
神無月 神おはさねど柏手をおほさくならしひとつを願ふ

耳 栓 高 橋 梨穂子*新潟

見慣れないほころもわたしの一部ならわたしも地球の一部なんだろう
この面を上にしろって書いてあることに気がつく終わったあとに
雪あつくとじこめられてポストまで行くのも難儀する十二月
誰ひとり殺さなかった一日の終わりにお湯を沸かす 毎日
耳栓をすればわたしのどこかから食洗機のような音がする

うずまき銀河 中 島 知 子*新潟

寒風の中で昂を見た夜はうずまき銀河にくるまれ眠る

西空に銀に輝く星一つあれはシリウス夜を支配す

大雪に陽は燃え出でて中天に「世界一」とうりんごを思ふ

白銀のかくも美し雪なれどわが散歩道を春まで閉ざす

一年の御無沙汰でした除雪車の振動轟音冬の魚沼

熱 鮎 内 藤 丈 子 福井

おむすびに柚子味噌ぬりて焼く朝は越前にそり雪が近づく
石路の花咲く道に霜降りて晚起きに冬はたたずむ

仕込みゆくサバの熱鮎にほひたち越前にけふ初雪の降る

永平寺の山から冬がおりてくる托鉢僧のあかぎれの足

鯉のみが時をきざめり池の面に緋色つらなる紅葉の寺

大野 英子選

結婚記念日 社河内 久美子 三重

めづらしく「花を買えば」といふ夫とシクラメン選る結婚記念日

夫とわれ冬の日子しを背にうけて庭に二十のパンジーを植う
冬ひと日屋根にて作業をする人の几帳面さを夕日がうつす
誕生日の娘へいつものパイを焼く今年のかぼちゃはとびきり旨さう
ぬくぬくとオープン火のゆらめきてパンプキンパイは餡色を増す

まだまだ続く

岡田美子*京都

歩道行く帽子とマスクの老人がスリーナインの車掌のようだ
三密も人流の語も消え去ってコロナ禍だけがまだまだ続く
歩道おおう銀杏まぶしい風の中掃いても掃いてもひらひら逃げる
紅葉散り観光客もラーメン屋の行列も消え冬至近づく
思い出はありはしないが捨てられぬ夫の古びた黒いサンダル

伐採跡地

高野哲司 兵庫

ダンチクの「おひとりさま力」強きこと校舎の隅に一株生ふる
「ヨタヘロ期」の目標ひとつ定めたり例へばヨシの葉音聴くこと
ダンチクは「ヨタヘロ期」なぞ何のそのすつくと立てり水路の縁に
大漁旗を播磨の空へ掲げるとダンチクの茎ぐんぐん伸びる
金子みすゞの「大漁」の詩を想ひ出づ石垣まはりの伐採跡地

遠くて近い

森本順子*兵庫

押し入れに焦がした鍋が五つ六つ老いゆく母の悲しみがあ
鍋はだにしょう油を最後に回し入れ君の好物の焼き飯つくる
受話器置き変わらぬ友を想う夜愛媛と兵庫は遠くて近い
長持ちする足腰あれば一安心老いゆく我はたよりにしている
足裏をもっと大事にケアしよう「痛気持ちいい」ところを押さえる

秋の日暮れ

岸下澄江*鳥取

寝言よし軒もよろしそばで聞き生きてること今は一番
心配ごとなど気にしてはいられない秋の日暮れは突然に
かさかさ乾いた音をたてながら落ち葉は冬へ走っていきま
すばつさりと刈り込みをした紫陽花はまるき芽を出し春へそな
え長ぐつの児らあちこちの水たまりに映る青空かきまぜ帰る

逆さの空

中村恵*鳥取

欄干から車の裾から木の実から逆さの空をつららは映す
雪のある地表ほのかにあかるくて空は下から上へ濃くなる
いもうともわれもおかつぱだったころ好きだったもの母とグラ
タン歳晩のココスあたたかデミグラスグラタン持つてロボットが
来るぶつかつてさばいてなます。吹雪の夜わたしに代わるフ
ロントガラス

鈴木竹志選

茶道検査

石塚恵子 香川

ATMで年金を出し代引きでカラーゲン購ふ姑九十三
教へ子の祝宴近し秋の夜の窓に映して三番叟^{きざら}復習ふ
五時間に及ぶ茶道の検査終へ少しほころぶ床の西王母
石州流茶道師範のお祝ひに友から届いたスパークリングワイ
ン並び立つパプリカの実よ黄にならず赤くもなれず師走の
畑に

ハグして欲しい

新明恭子*香川

焼菓子のガトーショコラをいただきて一人のコーヒー二杯目もひとり

駆け寄りてハグして欲しい韓国のドラマみたいにみたいな人に
値上げした回転寿司の味、ネタのチェックをしつつ十皿食べる
十九軒四十五人のわが地区に寡婦は八人やもおはおらず
春来れば十九軒のわが地区も小学生のいない日がくる

心は 二十 高見艶子 愛媛

短歌詠みて一度のみ光受けし吾驍二師の色紙お宝となす
心ばへ優しき友は場所言はず施設に入りしと人づてに聞く
コロナ禍に誰にも会へず逝きたると幾人を言ふ老いたる友は
鶉色の帽子かむりて冬山の朝を歩けば心は二十
下手でもいい短歌止めるな夫は言ひ出詠したかと早々と聞く

利息 一円 江崎玲子*福岡

残高が0の亡夫の銀行の預金解約利息一円
亡き人のカード解約その前にポイントで買う「そらまめっち」
亡くなるのと連れてゆくのか次々と壊れる家電は副葬品なり



津金 規雄選 「その二集」特選

コロクン 浜野昌子*北海道

街路樹の落葉が香る帰り道心弾ませ初雪を待つ
小春日の居間のソファで眠る猫寝言(こ)によこによ夢見ているか

山肌にあまたのパネル太陽光再生可能な森はもうない
庭に木を植えぬ人増え家に窓つけぬ人増えシエルターか家は

鈍行の旅 酒井恵子*長崎

金婚を無事に通過して次は終点のない鈍行の旅
長いこと空室だったアパートに明かりがふたつ寒さやわらぐ
ペランダのカネノナルキにゴミ袋かぶせておりぬ温室代わりの
悩む娘の力になれぬもどかしさ冬の夜道を歩くが如し
泣いている娘の声は聞こえても顔をみたいよ抱きしめたいよ

千両の鉢 大津慧美子 大分

けふ買ひし洗顔用泡立器楽し夫にも見するそのあわの密
寝る前に飲む白湯うまし朝まで体うるほし宥めてくれよ
まだ床の夫に声かく初雪の降りあることを子供のやうに
正月までは採られじとて移したり鶉の狙ふ千両の鉢
去年開きしクリーニング店の入口に早くも閉店の紙貼られあり



病癒えやんちゃん猫に戻ったね壁で爪研ぎカーテン登る
うちの猫もとは「コロナ」という名です不都合生じ「コロクン」となる
特養の母へと渡すカレンダー家族の記念日書き込んでおく

絵になるすみれ 秋山幸子 千葉

秋の午後(絵になるすみれ)買ひし日に額縁となる鉢を選びぬ

李太郎の山茱萸の絵に記さるる日付は母の生年月日

押入れの奥より出でたるオルガンの裏に祖父の字「和子ちゃん武蔵」捨てられぬ母の洋服その代はりわが服どつさり捨ててしまひき年の内に新芽はやくも芽吹きたり枯れしあぢさゐの枝先の蒼

師走のマルシェ

谷 真 樹* 神奈川

朝がきて枕元にはプレゼントあるのだけれどうれしくはない
こころないことは層をなしてゆく枯れ葉が沈むピオトープの冬
線引きのない冬のごとく肉親がいちばん近くて遠くの他人
リース作り教室の前通りすぎ心療内科の扉を開ける
わくわくを箱詰めにした柚子の実がなかく並ぶ師走のマルシェ

昼寝の時間

人 見 江 一* 神奈川

蜜蜂は一生をかけて蜜集めひと匙ほどの蜂蜜つくる
亡くなった人の年齢にかかると喪中はがきが届く霜月
図書館の貸出記録のレシートにうたを書き添え葉に使う
コーヒーとタバコの匂うジャズの店狭く急なる階段下る
とりどりに風の浜辺に横たわりサーフボードも昼寝の時間

えんべちゅ

丸 山 淳 子* 東京

鉛筆をえんべちゅという孫のいて何と愛しきその口びるよ
街角の金木犀に香りなく行き過ぎて気づくマスクのせいと
くるくるにシヨール巻かれて幼な子は乳母車のなか雪だるまのよう
たつぷりとシャンソン聞きしディナーシヨウおほろ月夜を歩みて帰る
在りし日に夫の入れたるそのままにハンカチ残る上着のポケット

水上 英季選

なんとかなるさ

金子英子* 新潟

鴨鍋はクレソンよりも葱がいい「失楽園」には向かない私
黒い布窓にめぐらせひっそりと車は並ぶ道の駅の夜
真夜中に目覚めて見れば車外では黒い舗装に雪がちらつく
凍りつく階段登り富士吉田の展望台に富士を見に行く
食料と水を積み込み込み渋滞の雪道進むなんとかなるさ

メークロン市場

佐藤彩湖* 新潟

向かい席にマスクしてない人が来て三センチずつ左へ逃げる
ぬばたまの夜の底からぼんやりと機窓に届くカオシユンの灯が
電車来る度に線路の両脇のテントをたたむメークロン市場
庭じゅうにサンセベリアが植えられたレストランにてタイ料理食む
ボージョーレーのボトルの前で立ち止まり長く考えベットボトル買う

震へる国

水野恵子 富山

スペイン戦ちらちら見では朝食のハムエッグ作る五時のキッチン
ワールドカップに歓喜する国あればまた戦禍で寒さに震へる国あり
きな臭い世界情勢見るときにはあばが願ふは孫らの幸せ
大中小孫のワイシャツ並びある今日のお日様いつばい吸ひて
令和四年あとひと月となれる今日うさぎの絵柄の日めくりを買ふ

霜月の闇

権田陽子 静岡

サッチモのだみ声ひくく胸に染み父の煙草の香りたちくる

目の端に子ら捉へつつ歌留多よむ母若かりし正月の夜
夫には告げず「コスモス」に入会す「秘密結社」とひとりうそづく
新月は奇しき力を宿すとふ霜月の闇に窓開け放つ
目の奥にひかり焼き付け流星は師走の空を東へよぎる

しかし楽しい 深 沢 泰 二 三 重

おみおつけに豆味噌をとき入れながら古い記憶は冬のことばかり
遅い朝食の部屋に冬日のみちたりて何にもない私があゝ
薄ら陽のたうとう消えて庭すみの伊予柑の実も暗くなりたる
朝食後茶を酌みをれば十一時することはなししかし楽しい
むかし銀座に赤いマントのサンタさんがるたやうな呑めなかつたやうな

田宮 朋子選

一片のスイカ 土 山 純 子*兵 庫

晩秋の庭の南天紅き実をズシリとつけて野鳥を招く
小中高と病母のもとで育ちし吾思えばヤングケアラなりき
澄みわたりたる秋の日に一片のスイカ甘いと言いて義兄逝く
大地から栄養たつぷりいただいた大きな蕪をポターージュにする
一匹の荒巻鮭を十五切れに切り分ける力我より失せぬ

ナースつぶやく 尾 端 桜 子 香 川

うつむきて庭の落ち葉を掃く夫心しづまるとぼつり言ひたり
スマホから多様な言葉取り出して「理不尽な親」などと言ふ孫

カタル戦この時とばかり地図広げ孫に説く夫元教師なり
観戦後ゴミ拾ひするサポーターかつての野球指導が蘇る
「コロナ下に忘年会などありえへん」最新線のナースつぶやく

雲海の中 白 井 玲 子 佐 賀

独り居の叔母の畑物穫れ過ぎて取りに来よとの電話二度あり
山城は天守閣のみ現はれて人寄せつけず雲海の中
軌道上のISSのタイムスケジュール秒のずれなく現れ消ゆる
見逃したISSを今宵こそ見む月冴ゆる冷たき空に
前撮りの花嫁は朱の打掛でもみぢの下に笑みて立ちたり

バランスボール 小 森 田 より子*熊 本

糸島の光と風をうけているピクトグラムのようなサーファー
体幹と心のぶれを鍛えんと座つてみたりバランスボール
夫用の椅子のクッションカバーにとチェックのシャツを变身させる
数分でクリスマスツリー設置せりAラインの服着せるがごとく
買い置きの不祝儀袋ばかり減り令和四年の終わり近づく

驟 雨 牧 島 幸 造 鹿 見 島

コロナ禍で三年ぶりの文化祭われらの短歌も花を添へむか
わが家の固定電話はケータイを探すときのみ役に立ちをり
スパーで安く買へるとも送るべし親が手をかけ作りし野菜
出勤を阻むがごとき驟雨にて職場に着けば止んでしまへり
夜の道ハブを見つけて散々に悪戦苦闘し生け捕りしたり